
銀魂 / Fate 『Fate』組の江戸見学ツアー！

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 / Fate 『Fate』組の江戸見学ツアー！

【Nコード】

N6356G

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

まったく依頼がこなくて暇な万事屋。そこで凜とセイバーは江戸の街を見て回ることにした。

第一訓：家の中にはっかないで外で遊びなさい（前書き）

バトル続きだったので、コメディな感じを書いてみようと思います
！

第一訓：家の中にはつかいしないで外で遊びなさい

えいりあん騒動から数週間。江戸で『万事屋』を営む銀時達は依頼が全く来なくて暇を持って余していた。

ソファアに座り、紅茶ではなくお茶を飲む凧とセイバー。

「…暇だわ」

「…暇ですね」

依頼が来ないので、みんなやる事がなくて暇なのである。

ちなみに銀時はデスクの椅子に座って顔にジャンプを置いて、アイマスク代わりにしてイビキをかきながら寝ている。

神楽は定春と一緒に散歩に出掛けていて、新八は今日は休みである。

「ギルガメツシュもどこかに行つてしまいましたし…」

セイバーがため息を付いた。

「私達も何かしようかしら…」

お茶を飲みながら凧が言った。

二人はしばらく何をするか考えた。

銀時のイビキだけがやかましく聞こえた。

「リン」

セイバーが何か思いついて凧に声をかけた。

「何？」

「江戸の街を見て回るのはどうでしょう？この街やギントキの知り合いを知るいい機会です」

とセイバーが提案した。

「いいわね。それじゃあさっそく行きましょう」

「はい」

二人は立ち上がり、銀時を残して万事屋を出た。

第二訓：銀魂の花屋さんは最強である（前書き）

お待たせしました。

第二訓どうぞ！

第二訓：銀魂の花屋さんは最強である

万事屋を出て江戸の街を見て回ることにした凧とセイバー。

二人はとりあえずその辺をブラブラすることにした。

だが、この後二人は早くも万事屋トリオが味わった恐怖を体験することになる。

凧とセイバーは万事屋の近くを歩いていた。

「外に出たはいいけど、どこに行こうかしら？」
歩きながら凧が言った。

「おや？」

セイバーが足を止めた。

「どうしたのセイバー？」

凧が首を傾げた。

「こんな所に花屋があります」

セイバーが見つけたのは花屋だった。

「へえー。見たこともない花が沢山あるわね」

「はい」

二人は見たこともない花に夢中になった。

「あれ？」

「今度はどうしたの？」

「何故、人がいないのでしょうか？」

セイバーが花屋の前の通りを見た。道には人っ子一人いない！

「そっいえば……」

凧も人がいないことに気付く。

その時。

「いらつしゃいませ」

店の中から声がした。

二人は花屋の中を見た。中から一人の男が出てきた。

「……!!」

二人はあまりの恐怖に声も出なかった。

男は鬼の如く恐ろしい顔をしていて、ライオンのような黒いたてがみが後頭部から首の周りを覆い、側頭部からは角が一对生えている。男は二人の前で立ち止まった。

「どうも初めまして。僕、花屋をやっています屁怒紹ヘトシロです」

最強の顔面と最凶ボイスで屁怒紹は凜とセイバーに自己紹介した。

「……こんにちは」

二人は顔を引きつらせながら挨拶した。

*

今、凜とセイバーは屁怒紹の家の中に入って正座している。

「そうですか。お二人は坂田さんの所に住んでるんですか」

と言いながら屁怒紹は大きな包丁を研いでいる。

「何もありませんが、くつろいでください。今、軽くつまめる物を作りますんで」

後ろにいる二人に振り返って屁怒紹が言った。

「は……はい」

「ありがとうございます」

二人は冷汗を流しながら返事をした。

（な……何よアイツ!? 顔がまるでバーサーカーじゃない!!）

凜は心の中でそう叫んだ。

（以前、ギントキがバーサーカーを見て『屁怒紹さん』と言った理由がわかりました!）

セイバーも動揺を隠せない。

部屋には屁怒紹の包丁を研ぐ音しかしない。

(このプレッシャー……！まるでバーサーカーと対峙した時と同じ！いや、それ以上……！)

セイバーが警戒を強める。

二人の冷汗は止まることなく流れ続ける。

「坂田さん達以外ではあなた達が初めてですよ。僕の店に来てくれたのは」

「え？」

屁怒紹の言葉にセイバーは少しだけ警戒を緩めた。

「昔からこんな外見だから人に怖がられて……でも坂田さん達はそんな僕と怖がらずに接してくれたんです」

包丁を研ぎながら屁怒紹は話を続けた。

「そして、あなた達も怖がらずに僕と接してくれた……友達が増えたみたいで嬉しいです」

屁怒紹は本当に嬉しそうに話した。

凜はさつきまでの恐怖がいつの間にか消えていた。

(……外見だけでこの天人の事、決めつけてたけど……本当は心の優しい天人なのかも……)と凜が思っていると。

「リン」

セイバーが凜に声をかけた。

「何？」

そう言つてセイバーの方を見ると、セイバーは鎧姿に武装してエクスカリバーを低く構えていた。

「セイバー？」

凜は首を傾げた。

「私が彼を引き付けます。その間に貴女は逃げてください」
セイバーが小声で言った。

「え？何言ってるのセイバー？」

「アレを見てください」

セイバーがある所を指差した。その先には冷蔵庫がある。

「冷蔵庫？」

「その下です」

言われて凧は視線を冷蔵庫の下に向けた。そこには『ジャンプ』が敷いてあった。

「ジャンプを敷いて冷蔵庫の高さを調節してる？」

と凧が言った。

「ジャンプは人が夢と冒険に心震わせる本だとギントキが言ってました」

セイバーは目を閉じてエクスカリバーを持つ手に力を入れた。

「それを！」

カツと目を開く。

「あんな使い方をする人がイイ人なわけがありません！」

声を上げながらセイバーは走り出した。

「ちよつと！何よその理由！？」

凧が叫ぶがセイバーは止まらない。

セイバーは屁怒組との距離を縮める。

屁怒組はまだ包丁を研いでいる。

「バーサーカー！！私は貴方を許さない！！！」

セイバーはエクスカリバーを上段に構えて跳んだ。

「バーサーカーじゃなくて屁怒組！！！」

凧がツッコむ。

「はああああ！！！」

セイバーはバーサーカーに向けて上段から剣を振り下ろす。

その瞬間。

屁怒組が後ろに振り返り、赤い瞳が光る。

直後、セイバーの横を何かが掠めた。

ドガアアア

屁怒組が投げた何かが天井に突き刺さった。

セイバーは呆然と立ち尽くす。凧も呆然と天井を見つめる。

天井には屁怒紹が研いでいた大きな包丁が刺さっていた。

「ダメですよセイバーさん」

屁怒紹がセイバーの前で屈んだ。

「危うく虫を踏むところでした。殺生はいけない」

指に虫を乗せて屁怒紹が言った。

「う……」

セイバーは屁怒紹の最強顔面に圧される。

「セイバー！戻ってきなさい！！」

凜が叫んだ。

「いえ！ここで退いては騎士の名折れ！！」

セイバーのエクスカリバーが黄金に輝く。

「ちよつとアンタ！宝具使う気！？」

「エクス」

凜の制止も聞かずセイバーは宝具の真名を解放する。

「カリバー！！！！」

剣を振り下ろし、黄金の刃が屁怒紹へ向けて放たれた。

「あああああ！！」

凜が頭を抱えて叫んだ。

「むっ！！」

屁怒紹が自身に迫る黄金の刃に気付き。

ガギイイイ

素手で殴って黄金の刃を弾いた。

「は！！！！？」

セイバーは驚いて目を丸くする。

ドガアアア

弾かれた黄金の刃は壁に当たった。

「……………!!!」

あまりの驚きに凜は声も出ない。

「ダメですよセイバーさん。剣なんて振り回して植物を傷つけたらどうするんですか」

セイバーは顔を青くして震えている。

「殺生はいけない」

キュピーン、と赤い目を光らせて屁怒紹が言った。

「はい……すみませんでした」

セイバーは屁怒紹に謝った。

こうして凜とセイバーは屁怒紹が植物や生き物を愛する心優しい天人であると同時に、バーサーカーよりも強い天人であるということを知った。

屁怒紹がバーサーカーになったら、もう誰にも止められない。二人はそう思った。

花屋の屁怒紹。

種族は傭兵三大部族と呼ばれる天人『だきに茶吉尼』。

第二訓：銀魂の花屋さんは最強である（後書き）

屁怒紹さんが強すぎ？ 気にしない、気にしない。

第三訓：マジでだらしない男

屁怒組の花屋をあとにして凧とセイバーは公園に向かった。

「はあ。ビックリしたわ」

公園のベンチに座りながら凧が言った。

「まさか私のエクスカリバーが弾かれるとは…」

セイバーは自分の最強の宝具を素手で弾かれてショックを受けていた。

「まあまあ。元気出なさいよセイバー」

凧がセイバーを励ます。

「ありがとう。リン」

セイバーはお礼を言った。

「それにしても天人の中にはあんなに強い種族もいるなんて…サーヴァントにも勝てちゃうんじゃないかしら？」

と凧が言う。

ガクッ

セイバーがさらに落ち込んだ。

「ああ！違うのよセイバー！！あの…その…」

凧が慌てている。

「あれ？万事屋のお嬢ちゃん達かい？」

後ろから男の声がした。

二人が振り返って見てみると。

「ああ。やっぱりそうだ」

黒いサングラスに顎髭を生やした男が立っていた。

「あなたは…」

凧が名前を思い出そうとしてると。

「マダオ？」

セイバーが首を傾げながら言った。

「マダオじゃねえ！長谷川だ！は・せ・が・わ！！」

長谷川は全力でマダオを否定して名前を言った。

「ああ。長谷川さん」

凧が思い出したように言った。

「そう。頼むから名前で覚えてくれ」

「すみません」

セイバーが謝った。

「えっと…君達は…」

「私は遠坂凧よ」

「セイバーです」

二人は長谷川に自己紹介した。

「ああ。遠坂さんにセイバーさんだな。この前は世話になったな」

長谷川はえいりあん騒動での礼を言った。

「ところで二人はこんな所で何やってるんだい？」

と長谷川は二人に聞いた。

「万事屋に仕事がなく暇だから江戸の街を見て回ろうと思ったんです」

凧が答えた。

「あゝ。万事屋なんてそう儲からないからな」

顎髭を触りながら長谷川が言った。

「あの…」

セイバーが遠慮がちに手を上げた。

「なんだ？」

「ハセガワはどうして『マダオ』と呼ばれているのですか？」
とセイバーが質問した。

「う……」

長谷川は顔をしかめた。ちよつと気まずい雰囲気になる。

「……まあ……いずれわかることだから話すか……意味はいろいろあるが俺の場合は『まるでダメな夫』『まるでダメオッサン』『略して』『マダオ』だ」

（要するにダメ人間ってこと？）

苦笑いして凜は思った。

「そういえば長谷川さんお仕事は？公園なんかにいいていいんですか？」

と凜が聞くと長谷川は顔をそらした。

凜は首を傾げる。

「俺……無職なんだ……」

小さな声で長谷川は言った。

「え？」

二人は首を傾げた。

「前のバイトはえいりあん騒動でクビになっちまったし……その前のバイトもクビになっちまって……」

段々暗い雰囲気になっていく。

「そ……そうなんですか……」

苦笑いをしながら凜は言った。

「俺はよお！」

いきなり長谷川が大声を出した。二人は長谷川の大声にビックリする。

「元は入国管理局の局長だったんだよ！出世街道驀進だったんだよ……」

二人は黙って長谷川の叫びを聞いている。

「それがよお！一時のテンションに身を任せちまってクビになっちゃまった！女房にも逃げられた！！バイトをしてもすぐにクビになって長続きしねえ！！不幸の螺旋階段を昇り続けてるんだよオオ！！」
頭を抱えて涙を流しながら叫ぶ長谷川。

「ちくしょう！もう俺は疲れた！誰か助けてくれえ！もう全て終わりにしてくれええええ！！」

公園に長谷川の叫び声が響いた。

二人は哀れみのこもった目で長谷川を見た。

*

公園をあとにした二人は江戸の街中を歩いてる。

「長谷川さん：良い事あるといいわね」

と凜が言った。

「そうですね」

セイバーは妙に元気だった。

「セイバー？どうしてそんなに元気なの？」

凜が聞いた。

「ハセガワの悲惨な人生に比べれば、私の宝具を弾かれた事などたいたことではありません」

と笑顔で言った。

「そ…そう」

「ハセガワは自らが不幸となつて周りの人に自信を与えてくれる素晴らしい人です」

セイバーはとてもイイ笑顔で言った。

「セイバー：貴方、他人の不幸で元気になる人だったかしら？『銀魂』の世界に来てキャラ変わった？」

二人は江戸の街中を歩いて行った。

第四訓：セイバーとタークマターは混ぜるな危険（前書き）

更新しました。

第四訓：セイバーとダークマターは混ぜるな危険

セイバーと凜は江戸の街を歩いていた。

「あれ？遠坂さんにセイバーさん？」

後ろから名前を呼ばれた。二人は後ろを振り返った。

「こんにちは。こんな所で何してるんですか？」

ツッコミ担当、志村新八が立っていた。

新八の家。

家の一室にセイバーと凜。それに新八と。

「まあ。あなた達が遠坂さんとセイバーさんね」

新八の姉・志村妙が座っていた。

「話は新ちゃんからよく聞いてます。いつも新ちゃんがお世話になっていきます」

とお妙が言った。

「いえ、こちらこそ」

とセイバーが返した。

「あつ。そうだね。よろしければコレどうぞ」
「と言ってお妙はある物を出した。」

「！！！！！！！！！！」

お妙以外の全員の動きが固まった。

お妙がテーブルの上に出したのは。

「卵焼きよ。遠慮しないで食べてくださいね」

真っ黒に焦げた卵焼き。

いや、それはもはや卵焼きとは呼べない。真つ黒に焦げたそれは食べる物ではない。名付けるなら『ダークマター』。ある者は目が悪くなり、ある者は気分が悪くなり、ある者は記憶がなくなり、ある者は目を焼かれた。

お妙によつて作り出された殺人料理。

「私の得意料理なのよ」

お妙はニコニコ笑いながら言った。

セイバーと凜は顔を引きつらせて『卵焼き』という名の『ダークマター』を見つめた。

(こ…これは…)

以前、小豆テンコ盛り『宇治銀時井』に異を唱えたセイバーですら抗議の声を上げられなかった。それほどお妙が作った卵焼きは酷かったのだ。

新八はお妙の横でオロオロと落ち着かない様子をしている。

「…で…では……いただきます…」

ためらいながらもセイバーは覚悟を決めて卵焼きに箸はしをのばした。箸で卵焼きを掴み、ゆっくりと口に運んだ。

そして。

パクッ

食べた。

お妙の卵焼きを。

ガリガリ

卵焼きを食べる時には出ない音を立てながらセイバーは卵焼きを食べた。

セイバーの顔色は青い。

ごっくん

飲み込んだ。

その様子を黙って見守る凜と新八。

「どうかしらセイバーさん？」

ニコニコ笑いながらお妙が言った。

「……………個性的な味です」

そう言っつてセイバーは。

バタツ

後ろに倒れた。

「セイバー!？」

「セイバーさん!！」

凜と新八がセイバーに駆け寄った。

「あら。大丈夫?セイバーさん」

お妙はあまり慌てた様子はない。

「解毒剤とかないの?」

凜が小声で新八に聞いた。

「残念ながらありません!自然に回復するまで待つしかありません

!」

と新八が答えた。

その時。

ザワツ

何か嫌な感じがした。

その嫌な感じはセイバーから感じた。

二人はセイバーを見て驚いた。セイバーがどンドン『黒く』なっ
ていったのだ。

金の髪は少し色が薄れ、頭に生えてる”アホ毛”も消えた。服も青
いドレスから、黒いゴスロリ衣装に変わった。

…え…?何これ…?

と二人が思った時。

カッ

黒いセイバーが目を覚ました。

「……!!」

二人は思わず後ずさった。

黒セイバーが体を起こして立ち上がった。

「セイバーさん？」

お妙が首を傾げながらセイバーを呼んだ。

ギロツ

黒セイバーがお妙を鋭い目で睨んだ。

「あら。そんな怖い目をしてどうしたの？」

黒セイバーに睨まれてもお妙は動じない。

セイバーは変わってしまった。明らかに今までのセイバーとは違う。

「貴様か？私に故郷の料理よりもマズく汚らしい料理を食べさせたのは？」

殺気のコもった目でお妙を睨みながらセイバーが言った。

「え……!？」

お妙は自分の料理を悪く言われた事に反論せず、セイバーから発せられる凄まじい殺気に圧されてビクツと体を震わせた。

「万死に値する」

ジャキン

セイバーの手に黒い聖剣『エクスカリバー』が現れる。

「ちょ……セイバー!!」

凜がセイバーを止めようとするが足が震えて動けない。

「エクス」

セイバーが黒いエクスカリバーを振り上げる。

「カリバー!!!」

セイバーが剣を振り下ろした瞬間、黒い閃光が場を包んだ。

*

意識を取り戻して凜は目を開けた。体を起こして周り見た。

家は跡形も無く吹き飛び辺りは黒焦げになっていた。そこには白目を剥いて失神しているお妙と横でお妙を呼ぶ新八がいた。

ガシヤ

足音がした。凜と新八は冷汗を流しながら足音がした方を見た。

黒セイバーが剣を持って立っていた。

「今日は見逃してやる。だが次に私にあんな物を食べさせたら命は無いと思え」

そう言つてセイバーはその場に倒れた。

髪の色が戻り、服も青いドレスに戻り、アホ毛も生えた。

「ん…ん〜」

セイバーが起きる。

「あれ？みなさん…一体どうしたのですか？」

とセイバーは首を傾げながら言った。

「は…はは…」

凜と新八は力無くその場に座り込んだ。

二人は思った。

セイバーにお妙の卵焼きを食べさせてはならない、と。心に固くそう誓った。

第四訓：セイバーとタークマターは混ぜるな危険（後書き）

感想・評価、待ってます！

第五訓・江戸の街は今日も賑やか（前書き）

今回で最終話。

是非、後書きも読んで下さい。

第五訓：江戸の街は今日も賑やか

新八の家を破壊したセイバーは凧と一緒に逃げるようにその場を立ち去った。

「シンパチには申し訳ないことをしました」
落ち込みながらセイバーは歩いてる。

「だ：大丈夫よセイバー。きつと次の長編にはもう直ってるわよ！」
とセイバーを励ます凧。

「だといいいのですが」

「ほらっ。早く次行きましょう！」

*

定食屋。

「いらっしゃい」

凧とセイバーが定食屋の中に入った。

「おっ」

席に座ってる男が二人を見た。

「あっ」

「トシ」

二人も男を見た。

男は真選組副長・土方十四郎。今日は真選組の制服ではなく着物を着ていた。

「土方さん。今日はお仕事は？」
と凧が尋ねた。

「今日はオフだ」

そう言つて土方は前を向いた。

「隣よろしいでしょうか？」

セイバーが土方に聞いた。

「好きにしな」

「では」

二人は土方の隣に座つた。

「へいっ！土方スペシャル一丁！！」

そう言つて店のオヤジは土方の前にある料理を置いた。

「！！！！？」

ソレを見て凧とセイバーは吐き気に襲われた。

白いご飯の上に大量のマヨネーズが乗つかつてる料理。

『土方スペシャル』。

土方はソレをガツガツ食べ始めた。

凧とセイバーは吐き気を抑えながら定食屋を出た。

セイバーには『土方スペシャル』に異を唱える気力もなかった。

街中を歩いていると。

「その二人のおねーちゃん！ウチの店で働かない？君達ならすぐ
トップになれるよ！いやマジで！」

うっとうしい長髪の男にキャバ嬢の勧誘をされたセイバーと凧。

「私達の場合。おねーちゃんと言うよりお嬢ちゃんでは？」

とセイバーが言った。

「てゆーか何よあの白い化物！？」

凧が長髪の男の隣に立ってる白いペンギンお化けみたいなものを指
差した。

「白い化物じゃないエリザベスだ」
長髪の男・桂小太郎が言った。

からくり堂。

「おおつ。万事屋に新しく来た嬢ちゃん達か」

このジーさんの名前は平賀源外。江戸一番の発明家である。

「こんにちは平賀さん」

凜があいさつした。

「そつちの嬢ちゃんはセイバーと言ったか？」

セイバーを見て源外が言った。

「はい」

「銀の字から聞いたが、お前さんも剣を使つらしいな」

「はい」

セイバーは頷きながら答える。

「セイバー。そこにある刀を持ってみる」

源外が壁際の床に置いてある刀を指差して言った。

「これですか？」

セイバーは刀を拾った。

「鰐つばを後ろに引いてみる」

「こうですか？」

源外に言われてセイバーは鰐を引いた。

ピュッ

刀の先端から一条の黒い液体が出た。

「醤油が出る」

と源外。

「「何で醤油!?!」」

*

カーカーカー

時刻は夕方。

二人は疲れた様子で万事屋に向かっていた。

「疲れたわね…」

と凜。

「江戸の住民は変わった人が多かったですね」

セイバーも元気がない。

「もう帰って休みましょう」

「はい」

二人は万事屋の前まで来た。

その時。

ヒュルルル

何か落ちてくる音がする。

「え？」

二人が顔を上げた直後。

ドカーアア

二人は爆発した。

正確には、バズーカの弾が二人に当たって爆発した。

「フハハハ！どこを狙っている雑種！！王の財宝！！」

道のと真ん中でギルガメツシュが大量の宝具を発射している。

「あんたも、どこ狙ってんだ？俺のバズーカで粉々にしてやるぜイ
！！」

真選組一番隊隊長・沖田総悟はバズーカを撃って応戦してる。

沖田の撃ったバズーカの流れ弾に当たって真っ黒焦げになった凜と

セイバー。

「リン…」

セイバーが口を開いた。

「何…？」

「この街は……江戸はとても賑やかですね……」

今日一日の出来事を思い出しながらセイバーは言った。

「賑やか過ぎよ……」

そう言っつて凜は気絶した。

*

万事屋の中。

銀時はソファで横になって寝ていた。

外から沖田とギルガメッシュの撃ち合いの音がうるさく聞こえた。

銀時は僅かに目を開けた。

「うるせーな」

一言呟いてまた目を閉じた。

第五訓：江戸の街は今日も賑やか（後書き）

コメディって難しいですね。

次の長編ではまた

バトルに戻ります！『えいりあん来襲篇』の続編です。感想・評価
ありがとうございます！

これからもよろしくお願
いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6356g/>

銀魂 / Fate 『Fate』組の江戸見学ツアー！

2010年10月28日07時00分発行